今、振り返る教師としての原点

私を育てた あの時代、あの出会い

同期から学んだ進路指導のあるべき姿

千葉県立船橋高校　山口久美

勤務校が変われば、それまでの経験では対応できず、ゼロから学ばなければいけないことが教師にはある。初めて赴任した進学校でいきなり進路指導部に配属になり、右も左も分からない中で進路指導の根幹を教えてくれたのは、採用年次が同じ同僚だった。

進学校勤務に戸惑う日々

千葉県立千葉東高校に赴任したのは、教職歴17年目のことです。進学校に勤務するのは初めてだったので、当初は緊張感でいっぱいでした。

前任校では、学ぶ楽しさを伝え、50分の授業に集中させることに一生懸命だったのに、この高校では、私が教室に入ると全員が注目して授業を聞き、少し説明が足りなかったなと思った時は、授業後に質問の列が出来ました。慣れないうちは生徒の真剣な視線が怖く、進学校の授業のレベルや進度に自分を適応させることに必死でした。

校務分掌は進路指導部となったのですが、教科指導力を付けることで手いっぱいで、とても進路のことまで考える余裕はありませんでした。そもそも進学校の進路指導では何をすればよいのかさえ、よく分かっていませんでした。

状況が変わったのは、2年目に勝田幸裕先生が同校に赴任してきてからです。勝田先生は私と採用年次が同じ同期でしたが、進路指導については既にエキスパートでした。最初の年は職員室で隣同士の席で、翌年からは2人とも進路指導室に常駐することになりました。そこから私は進路指導の根幹を勝田先生から学ぶことになりました。

生徒の可能性を潰さない

進路指導部で私たちが最初に目指したのは、「進路指導室を生徒が相談に来やすい場にすること」です。当時の千葉東高校には、「生徒は自分が受験したい大学を受験すればいい。結果は自己責任だ」という雰囲気がありました。また生徒も学校をあまり頼りにしていませんでした。しかし、これでは生徒の自己実現を支援することは困難です。教師は生徒のことをよく理解した上で温かく見守り、生徒は教師を信頼しているという関係をつくる必要があります。

勝田先生は生徒が進路について相談に訪れた時に、決して頭ごなしに「駄目だ」と言わない先生でした。例えば、部活動を引退した3年生の7月から受験勉強を始めた生徒が、東京大を受けたいのだけれど、世界史の対策が手付かずだと、10月になって相談に来たことがありました。そのような時期から新たな科目の学習を始めることに対して戸惑う教師もいる中、勝田先生は同じ進路指導室にいた地歴科の先生に、世界史の勉強の仕方の指導を依頼されたのです。進路指導部の全教師でその生徒を支えた結果、見事、現役合格を成し遂げてくれました。

生徒が自分なりの思いや志から進路変更を申し出た際に、教師が「無理だ」と否定してしまったら、生徒は希望を閉ざされてしまいます。教師のひと言は重いからこそ、教師は生徒の

同僚教師の言葉

同じ方向を向いて一緒に進路指導に取り組んだ

千葉県立桜が丘特別支援学校　教頭
勝田幸裕

私たちが千葉東高校に勤務したのは、同校が千葉県の進学指導重点校に指定され、全体の指導の体制を整え始めた時期でした。取り組みは全国の先進校の優れた実践を参考にしましたが、進路指導の姿勢については一本筋が通っていたと思います。それは、「将来、社会のリーダーとして活躍できる人間になるために、何をすべきかを考えてほしい」という思いです。進学実績も気になりましたが、それよりも大学入学後にしっかり伸びる生徒を育てたいと考えていました。そして生徒が進路の相談に来た時には、とことん付き合いました。

改革が大きく進んだのは、進路指導部の教員が、同じ姿

左 かつた・ゆきひろ　英語科。千葉県立千葉工業高校、幕張北高校（現・幕張総合高校）を経て、千葉東高校へ。その後、船橋高校（定時制）を経て、現在は桜が丘特別支援学校教頭。

右 やまぐち・くみ　英語科。千葉県立湖北高校（現・我孫子東高校）、泉高校を経て、千葉東高校へ。現在は船橋高校に勤務。進路指導部。

撮影◎桜が丘特別支援学校にて

可能性を信じて応援してあげること、そしてその可能性を実現する方策を打ち出すことが大切であることを、私は勝田先生から学びました。

また、勝田先生は目先の大学合格のことよりも、「社会に貢献できる人間になるために、何をすべきかを考えること」の重要性を、いつも生徒に話していました。生徒からの進路相談でも、成績のことだけではなく、なぜその大学でその学問を学びたいのかを徹底的に尋ねていました。

だから、生徒も私たち進路指導部の教師を信頼してくれ、やがて、放課後になると相談に訪れる生徒の姿が絶えない進路指導室となりました。生徒と信頼関係を築けたことで、進学実績も伸びていきました。

私は今、進学校の船橋高校に赴任して2年目になります。船橋高校でも進路指導部に所属し、千葉東高校時代に学んだ「生徒の思いを理解し、生徒の可能性を信じて応援する。そして、大学合格がゴールではなく、将来を見据えた進路指導をしていくこと」を目指しています。

教師という仕事をしていて一番うれしいのは、大学生や社会人になった卒業生が母校を訪ねて来てくれた時です。今、自分が取り組んでいる学問や仕事について、目を輝かせながら話す姿を見る度に、「あの時の進路指導は間違っていなかったんだな」と、実感することが出来ます。社会で自分と周囲の幸せを考えて活躍できる人材を、これからも育てていきたいと思っています。

勢で生徒に向き合えたからだと思います。特に山口先生は、いつも細部まで目を配り、取り組みを具体化する役割を果たしてくれました。「模試の振り返りシート」を、生徒、担任だけでなく、教科担当が書き込めるものへと改良し、生徒が模試の結果を分析しやすくなるように工夫したのです。その取り組みの結果、模試は千葉東高校の教育活動の基軸の1つとなっていきました。

当時の千葉東高校の進路指導部では、教師同士の「情報交換」も盛んでした。生徒の学習状況や生活の様子など、いろいろな話をしていました。だから進路指導部の全員が、一人ひとりの生徒のことを多面的に把握し、見守りながら支援していくことが出来たのです。

山口先生は私から「進路指導の根幹を学んだ」とおっしゃってくださいますが、私もまた山口先生と一緒に働く中で、「教師が同じ方向を向き、なおかつそれぞれの役割を担いながら物事に取り組んだ時、大きな成果を得られること」を学びました。千葉東高校の進路指導部時代に経験したことは、私にとって大切な財産となっています。